印象１１編―１０月の総評に代えて

○林　　桂○

●宇井麻千（大阪府）●
大事なものを
忘れてきたような空

雑居ビルの非常階段に座る

＊都市の雑踏の中の疲労と孤独。「雑居ビルの非常階段」は人々の視線を逃れる死角にある。

●春町美月（大阪府）●
ダンゴムシは
丸く身をちぢめて死ぬのだな
ころころと
風に乗りやすい
かたち

＊丸まって死に、風に運ばれてその姿を消そうとしているかに見えるダンゴムシ。死んでも身を隠し、身を守ろうとする。そこに作者が感じているものは、生と死の切なさだろう。

●いろは（京都府）●
からからの部屋に

ジャム瓶がひとつ
少し濁っている

＊「少し濁っている」のは、既に黴びているからだろうか。「からからの部屋」は、乾いた生活を反映しているものだろう。ひとりの生活空間を改めて見つめる。

●春町美月（大阪府）●
寒い雨の日
羊毛の匂いを嗅ぐ
あたたかな
ひとりぼっちが満ちてゆく

＊「あたたかな／ひとりぼっちが満ちてゆく」、特に「満ちてゆく」に惹かれる。寂しさの上に作られる小さな幸福感。

●いろは（京都府）●
自転車も寂しいときは泣くらしい
濡れたサドルにそのまま跨がる

＊雨に打たれた自転車のサドルにはその名残がある。それを「自転車も寂しいときは泣く」と感じる。それは作者の心が反映した見え方でもある。そのまま跨がるのは、その一体感からである。

●青木雅（埼玉県）●
醜くも美しくもない人たちと

レジに並んで順番を待つ

＊見知らぬ人々の中で暮らしていれば、その人々の美醜に心が動くことはほとんどない。関係性を持たないということはそういうことだろう。私たちは、醜くも美しくもない人々の中で暮らしているのだ。レジに並ぶときには、「社会的な距離」をとって。

●門野あおい（東京都）●

角の自販機が
しゃべらなくなって
一週間経つ

＊自販機の音声機能が故障したまま一週間が過ぎようとしている。それに何人が気づいているだろうか。それに気づいている「作者」は、毎日使用する人に違いない。「しゃべらなくなって」は、作者には話者のひとりとしての認識があったからだろう。

●長谷川柊香（宮城県）●

行く春に食器重なる音一つ

＊食器を洗って重ねるときに僅かにする音。そこに重なる「作者」の寂しい心のありようが感じられる。季節の移ろいも影を落とす。

●君風波音（埼玉県）●

食卓に
イチジクのせチーズが
出てきた
どうした母よ
恋でもしたのか

＊母親には不似合いな料理の一品に「恋でもしたのか」と茶々を入れる「作者」。しかし、それは母の僅かな心の移ろいにも感応する細やかさに満ちてもいる。

●桜望子（千葉県）●

風孕み膨らむ桔梗
肺の熱
冷ましつつ歩む
母の死んだ日

＊桔梗の中に閉じ込められた風は死んだ風である。「胸が熱くなる」とはいうが、「作者」は、それを肺と特定する。深い悲しみのために、身体的な熱のありかが強く自覚、実感されているからに違いない。

●呉田稔（福岡県）●

できるだけゆっくりと卵を割る

＊「できるだけゆっくりと」に深い孤独

を感じるから不思議である。丁寧な暮らしぶりのように見える。そこから寂寥のようなものが立ち上がってくるのである。

・今月は寂しい、孤心の「詩」に心惹かれることが多かった。１０月に詠われる「うた」の特徴だろうか。